

京都橋大学
地域政策・社会連携推進センター

つながる Vol.4

つながる

CONTENTS

Interface 実践の知 第4回

京都マラソン 救護サポーターとして

北小屋 裕 本学現代ビジネス学部救急救命士専門講師

現代ビジネスフォーラム報告

あなたは誰に家を作ってもらいますか？

松本 正富 本学現代ビジネス学部准教授

京都モダンイズム建築を訪ねて 第14回

国立京都国際会館

河野 良平 本学現代ビジネス学部准教授

第2回橋セッション

山科区における子どもの日常生活を考える

林 敬子 「京都不登校の子を持つ親の会」世話人

金森 博美 京都市山科区役所福祉部支援課課長

田中 春 京都市山科区役所福祉部支援課課長補佐

石村 春菜 げん Kids ★応援隊代表／本学人間発達学部3 回生

西村 拓馬 げん Kids ★応援隊副代表／本学人間発達学部3 回生

兼田 光 げん Kids ★応援隊副代表／本学人間発達学部2 回生

岡田 美穂 げん Kids ★応援隊会計／本学人間発達学部3 回生

乃生 祐典 京都子ども守り隊～守るんジャー～代表／
本学人間発達学部3 回生

川島 奈央 京都子ども守り隊～守るんジャー～/
本学人間発達学部2 回生

Interview ともに 第4回

町家で音楽とお酒と新しい出会いを楽しむ

木のぬくもり空間で、人がつどい、語り合い、夢を実現する

吉川 学 ミュージックサロン YOSHIKAWA



京都マラソン 救護サポーターとして

北小屋 裕 Kitagoya, Yutaka

本学現代ビジネス学部救急救命士専門講師

京都マラソンは、東日本大震災復興支援を掲げて2012年から始められ、本年度で3回目となる。京都マラソンは東京マラソンなどと同じ、都市型、大規模な市民参加型マラソン大会ということで、毎年1万6千人ものランナーが都大路を駆け抜ける早春のイベントである。

今回は、大会前々日に大雪が降り、前日までとても寒い気温が続いており、大会当日もとても寒いと予想されていたが、当日は晴天となり、温度も10度近くまで上がったため、絶好のマラソン大会日和であった。

その大会で京都橘大学は、2012年から毎年、救急救命コースの学生を中心に、救護サポーターの活動を行なっている。

主な活動は救護サポーターとして、ランナーが怪我をしたり、気分が悪くなったりした場合、即座に駆けつけ救護に当たる仕事である。

フルマラソンということで、走る距離も長く、また京都はアップダウンが激しいため、怪我や体調不良を訴える人がよくいる。

そのようなランナーを沿道からサポートする役割が救護サポーターである。

当大学の学生には、救急救命コースの学生が中心となって、他の学部生などに応急手当法や心肺蘇生法の講習会を開催することで、大会当日の活動要領をみんなで再確認し、大会でランナーに何かがあれば、即座に対応できる技術を身につけさせている。



救護の様子

過去の大会でも、1名の方が心肺停止で倒れられたが、即座に救護サポーターで対応し、救急隊へとつなぐことで、障害もなく完全社会復帰された。

このようにマラソン大会において、救護サポーターはなくてはならない存在であり、大会運営の要を担っていると言える。

今回、京都マラソンの日程が今までの3月開催から2月開催へと変更になったことで、当大学とともに活動していた、他の大学が卒業試験と重なることで、参加を見送った結果、今大会は、大学生の救護サポーターとしては当大学だけの参加となり、ますます京都マラソンで、京都橘大学の重要性が増し、また学生にとっても、京都マラソンを支えているとの自負が感じられる大会となっている。

この大会を通じて、本大学、また大学生として、人を助けるといふ精神、特に医療に携わる学生にとって、困っている人を助ける医療の原点を、見つめ直せるものと考えられる。医療の原点は、救急医療であり、怪我や病気で困っている人にいかに、手を差し伸べられるかが、医療の本質と考えられる。昨今他人のやっていることに極力干渉しないような風潮があるが、人は一人では生きていけないのであるから、人と人のつながりを大事にし、特に困っている人に対して、自ら手を差し伸べることが大事である。

そのような中で、この京都マラソンの救護サポーターは、医療の世界を目指すものだけではなく、今の大学生として、自らの行動を顧みてもらえる活動ではないだろうか。

大会中は、少しでも困った人はいないだろうか、必死に沿道から活動を支えていた、その気持ちを大会が終わった後でも持ち続けられているだろうか。

昨今の大学生は、とすればマナーが悪いと責められることがあり、バスや電車でも、困っている人に席を譲らないなど、周りに迷惑をかけていると、

よく聞く。

しかし、マラソン大会を通して感じてもらったボランティア精神、いわゆる困っている人がいれば助けてあげるといふ精神が、日々の生活でも生かされることで、周りの印象が変わり、また見る目も変わっていくのではないだろうか。

そして、その気持ちを持続していくことで、地域において、誇れる人となるのではないだろうか？

今回、京都マラソンを全面的にサポートすることで、学生一人一人の成長へとつながったと思える。

そこにこそ、本学が目指す教学理念である「臨床の知」があると言える。

今後もこの京都マラソンを支えていくという強い信念のもと、学生の成長の場と京都市、地域を支えるという目的意識を持ち、京都マラソンの教護ボランティアと言えば、京都橘大学と言われるように、サポートを続けていきたいと考えている。

この大会で培ったボランティア、いわゆる人を思いやる心をはぐくみ、また広めていくことが、この京都マラソンで学んだ最大の教育効果であると考えている。



集合写真

あなたは誰に家を作ってもらいますか？

松本 正富 Matsumoto, Masatomi

本学現代ビジネス学部准教授

FORUM

主催：京都橋大学 現代ビジネス学部

日時：2013年10月5日(土) 13:30-16:30

会場：キャンパスプラザ京都

■プログラム

基調講演 1

「大手ハウスメーカーと地域住宅生産システムとの比較」

竹山 清明 Takeyama, Kiyooki

本学現代ビジネス学部教授

基調講演 2

「地域住宅生産システムが持つ可能性を探る」

角倉 英明 Sumikura, Hideaki

独立行政法人建築研究所 建築生産研究グループ研究員

シンポジウム

竹山 清明 Takeyama, Kiyooki

本学現代ビジネス学部教授

角倉 英明 Sumikura, Hideaki

独立行政法人建築研究所 建築生産研究グループ研究員

小杉 悦旦 Kosugi, Yoshiaki

株式会社新盛建設代表取締役社長

杉山 泰 Sugiyama, Yasushi

本学現代ビジネス学部教授

コーディネーター

松本 正富 Matsumoto, Masatomi

本学現代ビジネス学部准教授

BUSIN

京都橋大学エクステンション事業の一つとして、2013年10月5日、キャンパスプラザ京都にて現代ビジネス学部主催のフォーラムが開催された。

近年の住宅産業において、大手住宅メーカーによる商品化住宅の流通が主流となりつつある中で、文化的にも不動産的にもその土地固有の条件によって成立するはずの住宅本来の姿が軽視される残念な風潮も垣間見られる。そこでこのフォーラムは、地域に密着しながら住宅の供給から維持管理まで総合的なサービスを供給する「まちの工務店」にスポットを当てながら、環境デザイン・組織マネジメントと地域づくりの各側面から論を進め、「私たちの暮らしの現場をもっと個性的に彩るため」の住宅について考える機会とした。

第一部の基調講演1では、京都橋大学現代ビジネス学部教授で居住系建築計画の研究者であり、かつ設計デザインの実践者である竹山清明氏により、大手ハウスメーカーと地域住宅生産システムの違いについての話がなされた。メーカーによる工業化住宅がシェアを伸ばす一方でスクラップアンドビルドが繰り返され、日本の地域性ある街並みがなくなりつつある危険性について欧米の住宅地の景観と比較しながら解説するとともに、ご自身での調査研究結果を踏まえて、一般的な生活者の住宅デザインの嗜好はモダニズムではなくむしろ洋風・和風を含めて歴史性を感じるところにあり、長期的なスパンでの景観を意識した本物志向のデザインこそが文化的にも経済的にも有効であると結ばれた。

続いての基調講演2では、独立行政法人建築研究所

建築生産研究グループ研究員で、地域住宅生産システム研究の第一人者である角倉英明氏により、地域で活躍する大工・工務店による住宅供給の特徴やその将来性についての話がなされた。住宅をつくるということは、極めて多くのヒト（職人や技術者）とモノ（建設資材や材料）とが関係し合う複雑な行為の集合であり、それらをマネジメントするのが工務店の役割であることが解説された。その上で、現場を主導する人材が持つノウハウの多さ、さまざまな要望にも個別対応できうる自由度の高さ、地域社会に密着する組織や人材への信頼感といった、“まちの工務店”ならではのメリットが語られた。

続いてのシンポジウムでは、建築設計者、研究者、工務店経営者、実際の生活者と立場の異なるメンバーにて、地域に根ざしたサステナブルな住宅の在り方についてのクロストークがなされた。小杉悦旦氏からは、スケールの小さい地域工務店は担当者の顔を見ながら新築の企画から竣工後の保守管理までワンストップな委託が可能な組織であるので、これをうまく活用して長い付き合いを目指してほしいとの話があった。杉山泰氏は、ご自身のイギリスでの生活体験をもとにしながら、住宅を単なる“ハウス=器”ではなく“ホーム=家庭”と捉えて、持続的に愛着を持って住まうことでその価値を高めることが肝要との思いを語られた。会場からの質疑応答も含



シンポジウムの様子

めて、デザインの問題やコストの問題も絡んだ沢山の議論がなされる中で、住宅建築は極めて多くの要素が絡む行為であるので一意的な方法を見出すのは難しく、発注する側と受注する側の双方ともに主体となって最善を探り合うという姿勢が大事との見解が示された。また、住宅というものを工業化と情報化が進む消費社会の中での商品と見るのではなく、持続的な財産として、さらには周囲の環境も含めた文化的価値あるものと捉えて維持していく姿勢が必要であるというのが、参加したシンポジスト共通の意見としてまとめられた。



講演の様子

京都モダニズム建築を訪ねて 第14回*

*文化政策研究センター広報誌「News Letter」からの連載回数を引き継いでいる

国立京都国際会館

河野 良平 Kohno, Ryohei

本学現代ビジネス学部准教授

1997年、国際的な温暖化防止のために議決された有名な「京都議定書」を採択した会議場がこの「国立京都国際会館」(1966)である。京都市営地下鉄・烏丸線「国際会館」行きに乗って終点まで行き、出入口4-2から地表に出るともうそこは「国立京都国際会館」の敷地である。周辺は緑に囲まれ、東には比叡山がそびえている。近くには宝ヶ池があり、敷地北側には道路を挟んで「グランドプリンスホテル京都(旧宝ヶ池プリンスホテル・村野藤吾設計)」が建っている。そのような恵まれた自然環境の中にこの建物は佇んでいる。

設計者は大谷幸夫(1924～2013)で、丹下健三の片腕として活躍した建築家である。この建物は公開懸賞競技設計、いわゆるコンペ(正式にはコンペティション)で当選した作品である。近年ではJR京都駅ビルなども同様の方法で設計案が決まった。1963年に実施されたこのコンペには国内から195点の応募があり、厳正な審査のもと大谷案が最優秀作品として選ばれた。この大谷案が選ばれた理由として、基本的な設計条件を満たしていることは当然であるが、その上で「台型・逆台型の統合という異色の造形表現をともなって結実しているが、けっしてそれはたんなる外見上の造形追求からではなく、一つには国際会議場という現代的社会機能への対応と、もう一つには比叡山の山容と宝ヶ池の水面とを

焦点とする古都京都にふさわしい自然および歴史的建築的風土との照応という、二つの課題」¹に見事に応じているからであるとされている。さらに、この競技設計は審査内容や応募作品が公開されており、専門家だけでなく一般の人々からも支持されたものであると言えるだろう。

建物だけ見ると、コンクリート打ち放しのクールでシャープな印象やV字型の構造を執拗に反復するデザインから、ややメカニックなものに見えなくもない(写真1)。しかし、その神社のように見える特殊な外観は、単に造形的な面白さだけではなく、会議場として求めら



写真1: 外観写真。壁が傾斜している様子が見て取れる。(写真: 筆者撮影)



写真2：現在のエントランスホールから見る。ここでも壁が構造体に合わせて傾斜している。(写真：筆者撮影)

れる空間のヴォリュームや構造上の解決策として総合的に生み出されたものである。求められた与条件から大規模なものになるのは当然であるが、全体の構成を大きく2つに分け、周辺の風景に馴染ませるようなスケール感や配置上の工夫が京都や日本の伝統的な美とうまく融合しているのだろう。一方、現在のエントランスなど内部空間は洞窟のようでもあるが(写真2)、これは前述のV字型の構造を生かすことによって生まれた傾斜した壁面による影響が大きい。逆にメインのラウンジは明るく広々とした空間になっており、それらの空間における陰影の対比は非常に効果的で、空間の性格付けに大きな役割を果たしている。また、メインラウンジの空間ではV字型の構造が上部に行くほど広がり、大きく伸びやかな造形としてデザインされている。これらのインテリアからも内部と外部が連続していることを認識することができ、建築家のコンセプトが外観だけでなく内部空間にまで一貫していることが理解できる。

大谷のコンセプトを率直に示す直筆のスケッチを見ると(図1)、建物だけでなく周辺の風景が書き込まれており、周辺の山々や水辺に対する意識の高さが表れている。これらのことは伝統的な日本建築や近代建築に潜む合理性や機械的な反復性が自然と調和することを大谷が見抜いていたとも言えるだろう。さらに言えば、師匠で

ある丹下健三が「香川県庁舎」(1958)で示したものを継承し、周囲の豊かな自然にとけ込むものとして変容させたと理解することが可能かもしれない。いずれにしる前川國男が「京都会館」で読み取った、京都という伝統的な都市において(郊外ではあるが)近代建築をいかに表現するか、という課題に対する大谷なりの回答であることに間違いない。大谷は「いかに機能的、論理的あるいは技術的・経済的に説明ができて、用地一帯の山や水や樹木を著しく傷つけることはもとより、宝ヶ池一帯の風景の中に建物を描いてみて、それが山や池の風情を損なっていれば、著しく異形のもが乱入して見えたら、その設計はどこか不適切なのだ」と判断し、そうした建物は建てない方がよい²と述べている。日常生活に追われていると忘れがちであるが、このような自然に対する態度は国家的なプロジェクトだけではなく、住宅のような身近で小さな建築であっても建築家として記憶しておくべきものである。単に建築に求められる機能や技術的な解決策を見つけるだけでなく、自然や美を表現しそれらと調和しようとする気持ちを大谷の建築は思い出させてくれる。

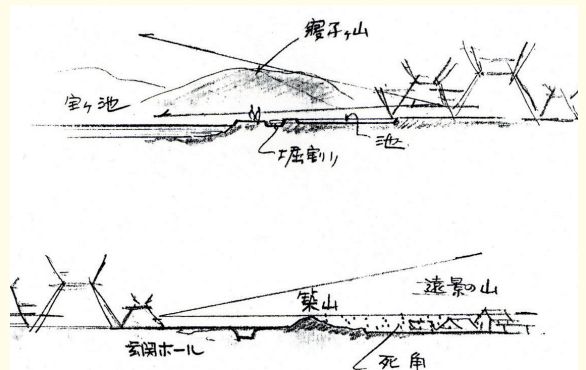


図1：大谷の直筆スケッチ。建物と周辺の山や池との関係性が示されている。『国立京都国際会館の建築：自然への照応と都市的機能の充実』p.74から引用。

¹ 宮内嘉久「一建築作品の誕生」『国立京都国際会館の建築：自然への照応と都市的機能の充実』1999, p.73

² 大谷幸夫「風景の中の国際会議場」、前掲書 p.65

第2回橘セッション

山科区における 子どもの日常生活を考える

報告Ⅰ（大学から）

石村 春菜 Ishimura, Haruna

げん Kids ★応援隊代表／本学人間発達学部3回生

西村 拓馬 Nishimura, Takuma

げん Kids ★応援隊副代表／本学人間発達学部3回生

兼田 光 Kaneda, Hikari

げん Kids ★応援隊副代表／本学人間発達学部2回生

岡田 美穂 Okada, Miho

げん Kids ★応援隊会計／本学人間発達学部3回生

乃生 祐典 Nose, Yusuke

京都子ども守り隊～守るんジャー～代表／本学人間発達学部3回生

川島 奈央 Kawashima, Nao

京都子ども守り隊～守るんジャー／本学人間発達学部2回生

報告Ⅱ（地域から）

林 敬子 Hayashi, Keiko

「京都不登校の子を持つ親の会」世話人

報告Ⅲ（区役所から）

金森 博美 Kanamori, Hiromi

京都市山科区役所福祉部支援課課長

田中 春 Tanaka, Yutaka

京都市山科区役所福祉部支援課課長補佐

コーディネーター

倉持 祐二 Kuramochi, Yuji

本学人間発達学部准教授

総合司会 & コーディネーター

神谷 栄司 Kamiya, Eiji

本学人間発達学部教授

1月15日（水）、本学明優館にて地域との連携・交流企画「第2回橘セッション」が開催された。このイベントは、本学の地域政策・社会連携推進センターが、地域社会や地方自治体・企業・NPO法人等との連携・交流を一層発展・促進していくことを目的として企画したもので、第2回目となる今回は、「山科区における子どもの日常生活を考える」をテーマに、地元山科区における子どもを取り巻く状況について3本の報告があった。

まず、報告Ⅰでは、本学学生団体、「げん Kids ★応援隊」と「京都子ども守り隊～守るんジャー」が、どのように山科地域で子どもを守り育てる活動を行っているかの報告を行なった。続いて報告Ⅱでは、「京都不登校の子を持つ親の会」世話人の林敬子さんが、自身の体験談を交えながら山科区における不登校の子どもの状況や地域との関わり方について詳細な発表をし、報告Ⅲにおいては、山科区役所福祉部支援課から山科区における取り組み状況や実態、地域の特徴について報告が行なわれた。今回は茶話会形式で地元山科の銘菓がふるまわれ、気軽な雰囲気なかで進められた。それぞれの報告に対する質疑応答や、山科地域の問題などについて活発な意見交換が行なわれ、盛況のうちに終了した。

■報告Ⅰ（大学から）

ボランティアの活動を通して考えること

げん Kids ★応援隊の活動について

げん Kids ★応援隊は、「子どもの想いを実現する場をつくる」をテーマに、①企画活動（子どもたちにもづくりやイベントを提案し、実施する活動）、②地域活動へのボランティア参加の2本柱のもと、ほぼ毎月1回の取り組みを展開している。山科“きずな”支援事業の助成金を受けて活動し、メンバーは35名程度である。

たとえば段ボール企画は、「段ボールを使って、大きなものを作りたい」という子どもたちの願いを実現しようと、本学の体育館に段ボールを置いて、自由に遊んでもらうものだ。子どもたちが独創性を発揮するうえでヒントになればと、事前に段ボール製の迷路・家・ロボット・動物等も製作した。当日は、2個の段ボールを重ねただけで大きな建物に見立てて遊んだり、裂いた新聞紙を敷きつめただけのビニールプールに大はしゃぎで

寝ころんだりする子どもたちの自由な発想に、強い印象を受けた。

勸修キャンプにも参加している。これは、勸修小学校の5・6年生が対象で、勸修小学校の児童の保護者（卒業生の保護者も含む）で構成する「勸修おやじの会」が主催する校庭キャンプである。げん Kids ★応援隊は、班（5・6年生混合）のリーダーとして多くの子どもと関わり、キャンプファイア等では、どの子も楽しめるように配慮したゲームを企画した。キャンプ終了後は路上で子どもから声をかけられるようになり、大きな手応えを感じた。

地藏盆も、主に大宅地域からの依頼を受けて、毎年参加している。地藏盆の習慣がない地方出身の学生は、親や祖父母世代ともつながることができる文化として、とても強い印象を受けている。げん Kids ★応援隊は、模擬店やゲーム遊びを担当して、異年齢の子どもたちが楽しく遊べるように努めている。

12月のクリスマス企画では、リースやスノードームの手づくりを楽しんだ。どの子も失敗せずにスノードームが作れるように、事前に何度も試作をした。その結果、当日の子どもたちはとても楽しそうで、何度も作っている姿もあった。図工の教科教育法の授業で「板返し」という、おもちゃの作り方を習った。それを教えると、親世代が懐かしがって、子どもと一緒に作っていたのが印象的だった。

昨年1月に、児童公園の利用者数や利用状況を調査したところ、来園する子どもは多い反面、そのほとんどは滑り台等の遊具を使ったり鬼ごっこやかくれんぼで遊ぶのではなく、数人で集まってコンピューターゲームをしていた。しかし、大宅小学校を訪問すると、子どもたちは鬼ごっこ等で遊んでおり、昔と変わらない面もあることをおもしろいと感じた。

京都子ども守り隊～守るんジャー～の活動について

守るんジャーは、「子どもが安全に育つことができる街・山科」を目標に掲げて、2006年に結成した。メンバーは31名である。子どもだけでなく、高齢者や中高生も含む地域全体のきずなを深めることをめざして、山科「きずな」支援事業の助成金を受けながら、①大宅小学校の下校時の子どもの見守り、②土曜日の夜間パトロール、③地域活動への参加等の活動をしている。

特に地域活動では、大宅小学校の餅つき大会や岩屋神

社のお祭り等にボランティアとして参加している。また、山科青少年活動センター主催の「サンタ大行列☆」では、中高生と一緒にサンタやトナカイの衣装をして、路上のごみ拾いをしながら、道行く子どもたちにはプレゼントを渡して、同センターから山科駅まで行進した。この取り組みは、住民から感謝され、ボランティア活動に関心を持つ中高生も生まれている。

今年から新たに、①大宅小学校サマーフェスティバルにおける山科区役所エコステーションの運営、②デイサービスを利用する高齢者との交流へと、活動が広がった。デイサービスでは、認知症の予防・改善効果があると言われる、簡単な読み書き計算の学習療法を担当しているが、学生自身も学習療法を学ぶことができ、得るものも多い。こうした地域活動への参加が評価されて、2012年には京都府防犯まちづくり賞を受賞した。今後も地域の結びつきを強める一助となるよう、活動していきたい。

ディスカッション

げん Kids ★応援隊の学生は、山科地域の特徴として「ボランティア団体の層が厚い。子ども対象に限らず、地域活動も含めて、多様なボランティア団体が活動している」ことを挙げた。

現代ビジネス学部の教員から、「児童公園は、以前とは大きく変化し、元気な高齢者の姿が目立つ一方、子どもの多くは保護者同伴で来園する。また、学校で子どもたちに『知らない人と話してはいけない』と教える傾向があり、小学生に声をかけたおとなが不審者扱いされることもある。このような状況は、現代社会が抱える苦しみの反映ではないか」との指摘があり、学生からは「児童公園で子どもたちと高齢者が一緒に活動するような取り組みができれば、公園の新しいあり方を示せるのではないか」との意見が出された。

■報告II（地域から）

不登校一でも地域は育ちの場

林 敬子（「京都不登校の子を持つ親の会」世話人）

不登校を経験したわが家の子どもの話したい。まず、不登校の子どもの生活実態は、個人によって異なり、時期や状況によっても変化する。この子の場合、

小学校2年生で不登校になった。親は、本人の思いに寄り添うべく、試行錯誤した。彼は「普通の学校生活を楽しまたい」と言うようになり、その結果、高学年になって私立小学校へ転校し、市立中学校、通信制の私立高校（とそのサポート校）へと進路を切り開いてきた。

この子は、不登校だったがいろいろな人との出会いに支えられてきた。市立小学校の先生も一緒に考えてくれたし、私立小学校では、不安で押しつぶされそうな心を気味悪いゾンビの絵で表現した時に、それをありのまま受けとめ花丸をつけてくれる先生がいた。中学時代は、自宅を離れて京都市児童福祉センター青葉寮で生活し、卒業後は中学で得た親友とロック音楽を楽しみ、ギターの練習に精を出した。また、マンガを通してゴルフというスポーツに興味を持ちゴルフセンターに自転車をこいで通った。自分のペースで自分の身体感覚をよりどころとして行動しようとする彼の特性から、サッカーや野球等の集団競技よりも個人競技のほうが取り組みやすかったのだろう。学校の勉強は苦手だったが、ゴルフのコーチに「プロをめざすなら高卒のほうがいい」と助言され、高校に進学した。

高校卒業後は研修生としてゴルフ場で働きながら、プロゴルファーをめざし、昨年23歳で、PGAトーナメントプロテストに合格した。今もキャディのアルバイトでハングリーな生活が続くが、自分のやりたいことをやっているの、うまくいかないことがあっても、他人のせいになくなった。それだけでも親は十分うれしい。

これまで親も子も、たくさんの人に支えられた。親の会では、つらさや愚痴を吐き出すことができた。子どもは、町内の大人に見守られ、近所の子どもたちと群れて遊んだ。地藏盆にも参加した。町内の地藏盆恒例の「交通安全」の立て看板に絵を描くのは、彼にとって大切な自己表現の場だった。また、団体が主催するパントマイムワークショップ、町たんけん、キャンプ、子どもまつり等に参加し、後にはボランティアとしても関わった。そこではNPO法人の大人や年上の若者たちのほか様々な年齢や地域の子どもたちと一緒に活動した。こうした取り組みにも育ちを支えられた。

私の一貫した願いは、人と人との安心できるゆたかなつながりを大切にし、それを広げることである。それに向けて、地域が不登校や登校拒否の子どもとその親にど

う関わっていけるのか、私もみなさんと一緒に考えて、できることをこれからもしていきたい。

ディスカッション

親はどのように変わられたかという質問に、林さんは、「親が焦って子どもを動かそうとしてもだめだと理解できるようになった。子どもを動かすよりも、まず家を安心できる場所にすることが大事だ。夫婦で、カウンセリングを受けるなかで、それまで相手の言葉や思いを受けとめられず、子どもにとって家が安心できる場所になっていなかったことに気づいたこともあった」と述べた。

また、なぜ学校や地域の対応が比較的うまくいったのかという質問に対しては、「近所には、受け継がれてきた文化を大事にされる古くからの農家があり、高齢者も多い。適度な距離感を保ちながら穏やかに接してくれたので、親も子も心を開いて、いろいろな人と関わることができた」と答えた。

会場からは、「長期にわたって不登校だった子どもが、定時制高校で自己回復を図る例は多い。それを『子どもを育む学校文化』という視点で考えると、学校はいま、子どもを成長させる機能を持てるかどうかの瀬戸際にあるのではないか。林さんは、子どもをレールに載せるのではなく、子どもの要求に添うかたちで、いろいろな育ちの場を用意し、さまざまな経験ができるようにサポートされたと思う。たいへん感銘を受けた」との感想が出された。

■報告 III (区役所から)

福祉行政から考える

金森 博美 (京都市山科区役所福祉部支援課課長)

田中 春 (京都市山科区役所福祉部支援課課長補佐)

山科区福祉部支援課の業務内容について

区役所で子育て支援を担当するのは主に保健センターと福祉事務所。山科区の福祉事務所には、生活保護を担当する保護課、介護保険関係を担当する福祉介護課、生活保護を除く福祉分野を担当する支援課がある。山科区の場合、福祉事務所の職員総数100名余りのうち約半数が生活保護のケースワーカーで、保護課には7つの係がある。

支援課の主な業務は、①子育て支援（保育所入所の申込受付、入院助産制度、ショートステイ事業、児童に関する総合相談窓口「山科子ども支援センター」の運営等）、②子育て支援・児童問題に関する状況把握と、即時対応可能なネットワークの構築（関係機関との連携で「山科子育て支援連絡会」を設置）、③児童虐待対策（通告・相談の受理、要保護児童対策地域協議会における情報交換や要保護児童のケース管理等）。

区内の児童虐待に関する相談・通告数は114件（平成24年度）で、山科子ども支援センターが受け付けた約200件の相談の半数は虐待に関する相談である。ただし、ケースが重複している場合もあり、通告数が虐待の実数を反映しているわけではない。山科区の場合、当事者・家族だけでなく、地域住民が区役所まで相談に向くケースも少なくない。子どもに対する住民の意識や関心の高さのあらわれではないかと思う。

京都市と各区には要保護児童対策地域協議会が設置されている。山科区の同協議会も、区内の関係機関の参画のもと、要保護児童の適切な保護を図るために情報交換を行なうとともに、児童相談所、保健センター、福祉事務所支援課で実務者協議を重ね、要保護児童のケース管理をしている。

山科区は、低家賃のアパートや市営住宅が多い。合計特殊出生率（15～49歳の女性が生涯に産む子どもの数）も、京都市平均1.21人に対して、山科区は1.35人と高い。年少人口（人口に占める15歳未満の子どもの割合）も12.4%と、京都市平均の11.6%に比べて高いし、実際に保育所入所申請の実務に携わっていると、山科区は4人目や5人目の子どもが多いとの感触がある。祖父母の年齢も比較的若く、40～50代の祖父母が同居もしくは近所に住んでいるケースも珍しくない。

こうした特性から、山科区では、貧困や虐待等、家庭力の弱さに起因する問題が多く生じているのではないかという印象を持っている。

ディスカッション

「山科区は、農村地域のよい面や、子どもに対するおとなの目線が優しいという面を持つ一方で、失業や雇用を背景にした勤労者層の自殺が多いという一面もある。子どもについても、貧困の影響が相対的に大きいのではないか」との会場発言を受けて、金森氏と田中氏は「貧

困が子どもに影響を与えていることを裏付けるデータはないが、被虐待児の家庭は、親もかつての被虐待児であることが多い。その場合、祖父母は経済的に厳しい生活をしてきたと思われ、教育にも関心が薄く、家族3世代とも教育水準が低い傾向にある」と述べた。

また、看護学部の教員は、山科区の出産をめぐる状況について、「母性看護学の実習を通して、児童福祉法36条にもとづく入院助産制度による出産の多さに驚くとともに、若い妊婦、非婚の妊婦が多いと感じた。そうした妊婦の背景には、望まない妊娠、虐待の世代間連鎖、低体重児の出産等の問題があるが、こうした虐待ハイリスク因子を持つ人に限らず、どの妊婦も悩みを持っている。その意味で、周産期への支援システムは非常に重要だ。今後も、地域と連携した周産期支援に向けて、情報交換や交流の場を持ってほしい」と述べた。

金森氏と田中氏からは、「保健センターで母子手帳交付時からプレママ支援をしたり、保健センターと福祉事務所の連携でハイリスク妊婦の家庭訪問等のフォローをしているが、まだ不十分というご指摘と受け止めた。山科子ども支援センターは、孤立した子育てに悩む母親への支援策として、山科区の地域子育て支援ステーションと主任児童委員の合同事業『やましなっこひろば』を実施している。これは、区内4カ所の児童公園で年2回、未就園児とその保護者に遊びや交流を楽しむ場を提供する取り組みである。携帯電話や自動車や大型商業施設に囲まれた現代、児童公園で集まる意義と、若い母親のニーズを重ね合わせながら、引き続き、さまざまな試みを重ね、それなりの魅力を出していきたいと考えている」との報告が行われた。



講師の皆さま

町家で音楽とお酒と新しい出会いを楽しむ

木のぬくもり空間で、人がつどい、語り合い、夢を実現する

ゲスト

吉川 学 Yoshikawa, Manabu

ミュージックサロン YOSHIKAWA

聞き手

濱田 智崇 Hamada, Tomotaka

本学健康科学部助教



対談風景 吉川氏（左）

江戸期の庄屋屋敷で音楽を

濱田 この家に入ってきた瞬間、気分がとても落ち着きました。かなり歴史を感じる建物ですが、いつごろ造られたのでしょうか。

吉川 江戸時代末期か明治時代初期だそうです。京都市の景観重要建造物に指定されたとき、市役所の方がそうおっしゃっていました。もともとは庄屋屋敷だったようです。

濱田 吉川さんはこの家のお生まれですか。

吉川 いえ、生まれ育ったのは左京区岡崎で、いまは妻や娘と滋賀県の米原市に住んでいます。吉川家がこの家の所有者となったのはいつごろかわかりませんが、とにかく吉川家の人間が住むようになって、その養子として、山科で学校の先生をしていた私の大叔父（母の叔父）が迎えられたんですね。その大叔父に子どもがなかったので、私が養子に来たという次第です。

濱田 このお店は、おひとりでも仕切ってらっしゃるのですか。

吉川 兄と一緒にやっています。兄も私も、音楽が大好きで、いつか音楽を楽しめるお店を持つのが夢だったんです。夢というのは、やはり実現したいものですから、2人とも「エイヤッ！」と決断して、会社を早期退職し、準備に3～4年かけた後、一昨年に開店しました。

濱田 お2人は何か楽器をなさるのですか。

吉川 私は、子どものころはクラシックギターを習い、サラリーマン時代は同僚とバンドを組んで、ベースギターを弾いていました。兄は、LPレコードをたくさん持っていますし、この店に置いているオーディオ機器も兄のものです。お客さんには、兄のレコードコレクションから適当に選曲したものを聴いていただいたりします。

Interview



吉川 学
昭和30年生まれ。京都出身。
損害保険会社退職後、
ミュージックサロンYOSHIKAWAを始める。
〒607-8161 京都市山科区柳辻中在家町 12-1
Tel. 075-581-0248
趣味はギター演奏。

昔はおくどさん、今はバーカウンター

濱田 こうしてお話している間も、外の光が差し込んできたり、少し陰ってきたりして、家の中にいながら自然を感じることができます。

吉川 裏庭には、花がいろいろ植わっていますが、梅、木蓮、金木犀などの樹木もあって、四季折々に目を楽しませてくれます。ミカンの木もあるので、ときどき、もぎたてのミカンをお客さんに召し上が^{なまじ}っていただくこともあります（笑）。表庭には、「柳辻」という地名の由来にもなっている柳の木があります。昔、この辺りには柳の木が多かったのでしょうか。

濱田 柳の木を見るのは初めてです。なるほど、それで「柳辻」というのですね。カウンターに座って、見上げると、天窓から青空や雲が見えるのも、とてもおもしろい。

吉川 夜は、そこから満月が見えるときもあります。昔は、ここに「おくどさん」があって、煮炊きをしていたようです。

濱田 昔の人は、いつも自然の移ろいを感じながら、日々の食事をつくり、暮らしていたのでしょうか。

スタンドグラスや鉄のドアノブといった西洋の雰囲気漂わせるものも、太い梁や漆喰の壁とよくマッチしています。

吉川 私が「いいな」と思うものを、一つひとつ選んで、手に入れてきました。自分でつくったものもあります。

それから、カウンターの後ろのカップボードや、座敷に置いた鏡付きのチェストは、1890年代に英国で造られたものです。当初は、カウンターの後ろは障子戸にして、その奥から月をイメージしたバックライトでボトルを照らしたら格好いいかなどか思っていたのですが、なかなか造作が難しそうなので、アンティーク家具を探しました。日本の古民家に英国のアンティーク家具が合う



座敷

だろうかと思いましたが、実際に置いてみると、意外に違和感がない。100年以上前の英国の家具と日本の古い家がこんなにマッチするとは、私も驚きました。

この空間を私はとても気に入っているのですが、ただ、冬の夜はかなり寒いんですね。だから、開店中は石油ストーブが3台、フル稼働します。お客さんも、だんだんストーブの周りに集まってきて、手をかざして（笑）。でも、みんなで炎を見つめていると、温度以上に暖かく感じるし、とても和んだ雰囲気になりますね。

ライブ空間としての町家の魅力

濱田 お客さんは、主にどんな人たちですか。

吉川 やはり音楽好きの方が多いですね。ご自身で楽器や歌をなさっているお客さんには、こちらから「ここでライブでもされたらどうですか？」と声をかけて、手づくりのライブをしてもらっています。

濱田 どんなジャンルのライブを？

吉川 フォークソング、カントリーミュージック、詩の

朗読会など、いろいろです。来週も、音楽をバックに宮澤賢治の詩の朗読を味わうライブがあります。もちろん、聴くだけでもOKですし、ライブの後はコーヒーを楽しんでいただきます。

いちおう私は作曲もするので、「こんな詩を書いたので、曲をつけてほしい」という方には、曲を考えてみたり、「しばらく歌ってなかったけど、久しぶりに人前で歌いたい」という方には、そばでギターを弾いて、一緒に練習したりしています。

コカリナ（木製オカリナ）をやっているお客さんがお仲間と一緒にライブをしたり、京舞の先生がおさらい会をしたり、大正琴をやっている方が発表会をされたこともありました。そうすると、ご近所の方も、「大正琴って、懐かしい。久しぶりに聴いてみたい」ということで、演奏会に来てくださったりします。

濱田 この空間と音楽を介して、つながりが広がっていく感じですか。

吉川 そうですね。実はきょうも、この後、あるお客さんが練習に来られるんですよ。その方は、山科の方ではありませんが、山科在住のお友だちに連れられて来てくださったのが最初でした。

私自身が、「音楽を楽しめる店をやりたい」という長年の夢をここで実現した人間ですので、お客さんも、自分の夢を実現するワンステップとして利用していただけたらと思っています。

いわば「大人の学会会」に出演するような感じかもしれませんが、ここは天井が高いせいでしょか、プロのフルート奏者も、「とてもいい音がする」と話しておられました。オーディオの専門家によると、とても音響効果のいい空間だそうですから、聴く側としても、演奏する側としても、楽しんでいただけるのではないかと思います。

さまざまな可能性を持つ町家空間

吉川 もうひとつのお客さんの層は、50代以上の女性ですね。お客さんの7～8割は女性だと思います。

濱田 それは少し意外な気がします。がっしりしたオーディオ機器とか、レコードコレクションの充実ぶりとか、ギターに譜面台とか、洋酒のボトルが並ぶ雰囲気とか、なんとなく男性客が多いのかなと思いました。



吉川 かえって異性のほうが話しやすいのかもしれない。女性の場合、ひとりでふらりと入ってきて、「以前から家のたたずまいが気になって、寄ってみたいと思っていた」とか「なんとなく懐かしい感じがするから」とおっしゃることがけっこうありますね。ときには、若いころの恋愛の話などで、「あのときはそう決めただけど、それでよかったんやろか」とおっしゃったりする方もありますが、そういう話が出るときは、たいいてい自分で答えを見つけてらっしゃると思うので、「それでよかったんじゃないですか。後悔しないでくださいね」と言ったりします。

濱田 私の専門は臨床心理学なのですが、吉川さんとそうしたお客さんとのやりとりは、何だかカウンセリングのようですね。

吉川 いえ、私のほうが人と人との関係について、お客さんから教えていただくことが多いというのが、率直な感想です。

濱田 こうして座っていると、本当にカウンセリングに使うのもいいかもしれないと思ってきました。いろいろな可能性のある場所だと思います。

吉川 少しうつ傾向をお持ちのお年寄りが、施設の職員の方と一緒に来られて、音楽を聴きながら、わりあい楽しく過ごしてくださることもあります。誰でも、どこか病んでいるところがありますから、ここで少しでもリラックスして、ストレスを発散していただけたらうれしいですね。

濱田 そういう意味では、このお店が山科の地域に必要な

とされつつあるのかもしれませんが。岡崎で生まれて、現在は米原市にお住まいの吉川さんから見て、山科という地域はどんな印象ですか。

吉川 ずっと昔から山科に住んでらっしゃる年配の方と、新しく山科に移り住んでこられた若い世代の方が混在している地域、という感じですね。そして、その人たちの間の交流は、私が見た限りでは、まだあまりないかなと思います。

私としては、自分のささやかな夢をかなえてくれたこの場所で、山科に住んでいる方々同士が、つながりをつくったり、楽しさや生きがいを感じたり、ライブで自分を表現するという夢を実現したり、そんな使い方をしてくださったらうれしいですね。

いわゆる「ゆるさ」の魅力

濱田 メニューは、ソフトドリンクとお酒が中心のようですが。

吉川 食に関しては簡単で、たこ焼き、チーズ&クラッカー、フライドポテトや柿の種、ナッツ等のおつまみ類かキーマカレーぐらいしかありません(笑)。スイーツは、シューアイス、フローズンケーキ、ドーナッツがあります。

開店を準備しているときに調理師学校に通ったので、いちおう料理はできるのですが、この近辺には飲食店がけっこう多いので、無理に競合する必要はないかなと思って、メニューを絞りました。飲食店の方々の商売も大事ですし、私は特に料理にこだわる気持ちもなかったので、「お食事はプロのお店でどうぞ」ということで、共存共栄できればいいかなと。

私にとっては「第二の人生」ですから、続けていけるだけで十分なんです。だから、「もう一杯どうですか?」は絶対に言わないし、いわゆる「付き出し」もいっさい出さない主義です。

濱田 そういう「ゆるさ」が魅力なのでしょうね。

吉川 玄人の方から見れば「甘い」と思われるでしょうが、そういう姿勢だからこそ、お客さんも来やすいのではないかと思います。

濱田 山科に暮らす人たち同士のつながりが広がったり、深まったりしていけばいいですね。

吉川 幸い、この家には木のぬくもりがあって、安らぎ

ます。もともと人間の中に刻み込まれているDNAのせいでしょうか、こういう古い家に住んだことがない方でも、「落ち着く」とおっしゃって、知り合いの方を連れてきてくださったりしますし、人の出入りが多くなると、家も元気になります。

チラシを配ったり、広告を載せたり、そういう宣伝はいっさいしないし、行列ができるような人気メニューがあるわけでもないのに、よくお客さんが来てくださるものだなあと思うこともあります。でも、それがこの家の持つ力ではないか、この家が人を呼び寄せているのではないか、そんな気がしますね。

新しい出会と夢の実現の場に

濱田 そうすると今後は、「大人の学芸会」も含めて、ライブをもっと頻繁にやっていきたいとお考えですか。

吉川 できれば毎月1回とか、定期的にやっていきたいですね。今度、二胡の演奏会を予定しているのですが、そこに来てくださったお客さんの中から二胡に興味を持つ人が出てくるかもしれませんし、私も二胡の音を聴いてみたい。みんなが新しいことに出会えるような、そんな場を提供していけたらいいなと思っています。

やはり人は、精神的な充足感が大事だと思うので、この店でのコミュニケーションを通して喜びや生きがいを感じていただきたい。夢を持つ人が来られたら、私はその夢を実現するお手伝いがしたい。私自身、「やりたいと思ったときが適齢期だ」と思って、この店を始めましたから。

濱田 じつは私、大学で箏曲部の顧問をしているのですが、部員は本当に頑張って練習をしています。一度、ここで演奏会をさせていただいたら、と今ふと思いました。

吉川 ぜひ使ってください。お琴でしたら、座敷に並べて、襖を開け放して、お客さんは玄関の土間に椅子を並べて座っていただくのがいいかもしれませんね。

京都は学生と住民が接触する機会の多いまちですが、学術講演会のような難しいものではなくて、音楽のように、もっと親しみやすい場で学生さんと住民の方が一緒に楽しむことが増えてもいいのではないかと思います。ですから、大歓迎です。ただし、出演料はお支払いできませんが(笑)。

(丁)

受けとめてもらえる場の存在意義 ～心のなかの「思い」や「夢」を大切に扱ってくれる場所～

今回、ミュージックサロン YOSHIKAWA の吉川学さんを私にご紹介くださったのは、シニア産業カウンセラーの吉岡俊介さん。吉川さんと吉岡さんは、かつて会社の同僚で、軽音楽バンドを組んでおられたお仲間同士である。そして、吉岡さんと私は「男性のための相談」という分野で、かれこれ10年以上活動を共にさせていただいている。

私は、1995年に日本で初めての、男性が男性の悩みを聴く電話相談窓口を開設して以来、この分野に携わってきた。2012年には吉岡さんと、内閣府「地方自治体等における男性に対する相談体制の整備支援のための調査検討会」の委員として一緒にさせていただき、男性が気軽に相談できる窓口の普及に尽力している。内閣府の意識調査によれば、「他人に弱音を吐くことがある」男性は約28%、「悩みがあったら、気軽に誰かに相談するほうである」という男性は約17%に留まり、46%もの男性が「男は弱音を吐くべきではない」と回答している。14年ぶりに年間3万人を切ったとはいえ、日本が自死大国であることに変わりはなく、その数は男性が女性の2倍に上る。男性に対する心理的支援、そして「自分の弱みを見せることになるとしても、助けを求めることにはメリットがある」という価値観が社会にもっと浸透することが必要であろう。

吉川さんのお話でも、ふらりとお店に立ち寄って、身の上話や、それにまつわる自らの思いを語る方がいるが、それはほとんど女性とのことだった。こうした場

合、語ることとそれを聴いてもらうこと自体に、癒やされたり、自らを振り返って整理したり、そこからまた次のことを考えられるようになったりといった効果がある（これはカウンセリングの基本でもある）。ところが男性は、語る前から「語って何になる」と頭で考えてしまって「そんなことに意味はない」と語ることをやめてしまう傾向があると考えられる。社会的に認められないもの、世間から見て価値のないものは切り捨てる習慣が身についているということかもしれない。

吉川さんが「夢を育てたい」とお考えになり、さまざまなライブを開催されているのも、ある意味でこの「語り」と共通する。社会一般にはまだ認めてもらえないかもしれないが、ここでは披露してみてもOKというスタンスで、その人の夢が育っていくのをサポートしていかれる。「世間から見てどうか」「社会的に認められるか」はとりあえず置いておき、自分のありのままを表現できて、それを受けとめてもらえる場。ミュージックサロン YOSHIKAWA はそんな場として機能していると考えられる。

今の大量消費社会においては、いかに効率よく、世間で評価されるものを生産できるかばかりが重視されがちであるが、それ以前に、それぞれの人の内面にはさまざまな「思い」や「夢」が詰まっていることは言うまでもない。そうしたものが受けとめられ、大切に扱われてこそ、精神的に健全な社会が実現し、真に創造的な未来が見えてくるのではないだろうか。（濱田 智崇）

つながる Vol. 4 (2014年3月20日)

発行：京都橘大学 地域政策・社会連携推進センター

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34

Telephone: 075-574-4186 Facsimile: 075-574-4149

http://www.tachibana-u.ac.jp E-mail: icps@tachibana-u.ac.jp



京都橘大学

地域政策・社会連携推進センター

Center for Regional Policy and the Promotion of External Relations
KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY